

女性語と日本語学

— 女性のことばの四層のモデル —

高 崎 みどり

このセミナーで私は、日本語学においても、今女性の使っていることばの実態をもっと調査し研究する必要があるのではないか、という提起をした。

女性語とか、ことばにおける性差とかを言うとき、そこで論じられている女性ことばの特徴とは、どういう女性のどんな場合のことばについてのものなのか、他の立場の女性の他の場合についてはどうなのか、等といったことが必ずしも意識されているとは限らない。何となく、一般的な女性のことば、女性らしいことばづかい、というようなものがあって、ふつうの女性はいつもそうしたことばづかいをしている、というような気がしている。

しかし、実際は、年齢により職業により立場によりさまざまなことばづかいをしており、同じ一人の女性でも、職場で働いているときのことばと近所で知人とおしゃべりをしているときのことばとは違っているはずだ。

従来の国語学における諸調査では、女性は多くの場合「主婦」であり、多様性に富む現代の女性の言語使用の実態は明らかにされていない。より実態を反映できる調査と分析が急がれるところである。

こうした提起に自ら試案として、女性のことばの四層のモデルを提出してみた。

これは、野村（1970）の現代東京語の構造についての三層のモデルをヒントにしたものである。

第一層は、家事や育児の場でのことば。家族や、家事・育児に伴う活動で接する人にたいすることば。具体的にことばの特徴をいうのは難しいが、漢語が少なく、文末・文節末の助詞やイントネーションなどでニュアンスに富むいわゆる“女らしさ”を出すことができるのではないと思われる。

この層のことばに対し、伊藤（1984）のように、「主婦の毎日というのは周りへの心くばりで明け暮れているともいえるが、小さな家庭を世界として

子どもの上に君臨し、自分の思いこみのままに一方的なことばを吐き続けて、それでまかり通っている暮らしだともいえる」という厳しい見方もある。

第二層は、対社会的な活動を役割としてこなす場合のことば。PTAや学校行事、地域活動などの会合で発言する。ボランティア活動・消費者運動・住民運動等に参加したり組織したりするときのことば。あるいは職業を持つ人がその職場で働くときのことば。

この層のことばを使う時には、接する相手との関係も種々多様であるし、個人としてでなく役割として自他を認知せねばならぬことが多いので、敬語の増減をはじめとすることばの使い分けにエネルギーを使わなければならない。

あまり“女性らしい”表現は抑制され、漢語の使用がふえる。構えて言語表現しなければならないという意識も高く、声の高さ、話のスピード、話の整え方なども変わってくる。かなり緊張感の高いことば使用の場であるので、「～のときの話し方（場合によっては書き方）」というようにマニュアル化しやすいのもこの層である。

また、男性の目に触れやすく、かつては、「ある目的をもった対話の問答が非常に下手だ」（注1）とか、「女の人がシステムチックにしゃべるときは序論から結論までしゃべりますね。こちらは結論だけを聞きたいのに、まず序論からはじめるというのが女の人の特性じゃないですか」（注2）などと批判の対象にされやすかった。

しかし、現在は、女性が第二層のことばを使う機会も増えており、また異なった見方をされるのではないか。働く場でのことばそのものではないので、あまり良い材料ではないが、職業を持った女性たちの座談会という同じ条件で40年隔ったものをちょっと比較してみよう。

T 私は入りました時からズッと事務ばかりやってまいりました。

K じゃ、私は何んでいったらいいんでしょう。最上級の言葉を使いますと秘書なんですけど、給仕みたいなお仕事をいたしております。お電話にも出ますし、タイプも打ちます。邦文ですけど。それからお客様にお茶もお出ししますし、お使い走りもいたしますから、秘書よりも雑役みたい。(笑)

- M 私だって今でもそうでございますよ。しょっちゅう雑役ですよ。
- K 速記をすこし勉強したものですから、裁判所へ行って速記をすることもいたしますし、なんでもいたします。
- I 私共の初めてお勤めに出ましたころに比べますと、このごろの方はだいぶ変わって来たようでございますわね。
- M それはもう、あなた……。
- K 第一、長くお勤めになる方が少いですわ。
- I 昔の人はほんとの職業としてお働きになる方が多かったですけど、今はお嫁入りまでの……。
- K そうなんですね。うちにいても詰らないからって。
- I 職業意識が変わって申しますか、どうも今のお若い方は、お休みが多うございますね。もちろん御家庭の御事情もございましょうけど、お遊びのこともあるんじゃないかと思うんでございます。どっちかって申上げますと、責任がないんでしょうか。
- K そうなんです。私もそれを感じますね。
- I 何かというと、すぐお休みになってしまいますから。
- K 前は夜、学校へいらっしゃる方が多かったですけど、今はそれもあんまりないようで……。
- M 私、お休みになる方があると、その理由をお聞きますけどね。
「オフィス・ガールの今昔」（『婦人朝日』1951年7月号——注3）
- I 私には仕事はもう無理だわなどと思いたまわないで、いろいろなライフステージにいる先輩の女性の意見も聞いたらいいと思います。「いずれ一段落したら戻って」とか、本に書いてあるようなことをそのままいわずに、ほんとに眠れないくらい悩まなきゃだめだと思えますね。
- K 本当に長く勤めたいと思ったら、とりあえず二、三年は家庭に戻って、といった選択肢は捨てた方がいいと私は思う。
- I どうしても楽な方に流れがちですからね。
- K 結婚や出産で辞めると思っている、事情があってやはり働くことにな

る場合もある。すると、いざそこから頑張ろうとしても時すでに遅し。だから私は、明日辞めようと、ずっとしようと、とりあえず同じ仕事をしておいたほうが、本人のためにも会社のためにもなると思うんです。

U ただ、ころっと辞められると、手塩にかけて育てたのに裏切られた、という気持ちになる。総合職は長く勤めてもらうことを前提に採って、そのつもりで判断をしますから……。

I 辞められると元も子もないですものね。ある時点までくればやる気が出てくるから、最初は丁寧に、甘やかすという意味ではなくて、少しきめ細かくみてあげることが必要なのかなと思っています。キャリア志向と能力とは必ずしも一緒ではなくて、能力はものすごく高いけれども、全然キャリア志向のない人もありますし。

「企業戦女になりたくない」（『朝日ジャーナル』1992年2月28日号）

座談会を記事にしたもので筆録そのままではないのだが、そういう条件を考慮に入れても働く女性の話し方が、40年の間に変わってきているという感じだけははっきりわかる。

さて第三層は、不特定多数を対象とする場でのことばである。

たとえば、新聞・雑誌に投稿したり手記や自伝を書く。第二層に属する活動についてマコシミからインタビューされる。地域のミニコミ紙や有線テレビ放送に関わる。また選挙の応援演説をする、等々。あるいは職業を持つ人は仕事の性格によって講演したり、講義・演説・研究発表・体験報告、あるいは活字になることを前提とした執筆活動などがある。

こうした場においてはそれぞれの場に応じての厳密なことばに対する要求があり、ことばの使い手はそれに合わせることを強く求められる。コミュニケーション云々ですむものではなく、内容が第一に要求される。非常な緊張感を伴うもので、女性らしい表現は多くの場合不適切と感じられ、避けられる。敬語の使用も抑制されることが多い。専門用語・外来語などがふえてくる。

何年か前に言われはじめた“主婦作家”の台頭、ニュースキャスター・アウンサーへの憧れ、根強い教職志望、政治参加の機会増加、趣味がこうじ

て教養講座の講師になったり、資格をとって教える側に廻りたいという希望の強さなどなどを見ると、この層のことは、決して一部の特権的な女性たちのものとは、もはや言えないのではないかと思われる。

最後の第四層は、役割から解放された時のことばである。職業から、あるいは主婦とか母親とかいった役割から自由になり、ごく親しい人に向き合う時のことばである。目的を持った会話であることは少なく、情報のやりとりよりも感情の通い合いの方が重視される。強調表現や誇張表現、感動詞をうまく使い、文末・語末など「～でしょ」「～わ」「わよ」といった女性が使うとされる助辞類が現れやすい。また「○○がさ」「～だもん」「～ちゃう」のようなくだけた言い方が現れることもある。

このあたりのことばは、「雑談」と言われればそのとおりであって、男性が、「役割からの解放」ということを理解できぬままに奇異の目を注ぎ、「女が自己防御的な構えを強くもっている上に、教養知識が乏しいとなれば、もはや雑談は緊張を生じさせるだけのものでしかなく、相手になっていると疲れてしまう」（注4）とか、「女の人は概しておしゃべりが娯楽なんでしょうね」「子どもがメチャクチャなことを自分でしゃべって喜ぶのと似たところがあるでしょう」（注5）といった感想を持ったこともかつてはあった。

だが、雑談的な言語表現も言語生活上、決して軽んじられてはならぬものであって、前述の伊藤（1984）でも特別養護老人ホーム園長の「男は職場でも家庭でもムダ話をする訓練ができていないので、老後は孤独しかありません。」ということばを紹介している。

以上の四つの層のうち、時間的あるいは精神的にどの層に中心を置いているかは人によって異なっていると考えられる。しかしたとえば無職主婦もかつては有職であった人が多いし、今後有職となる可能性もある、とか、女子大学生はアルバイト経験のある人が多く、卒業後も就職する人が大部分である、など、いろいろな面から考えると、どの女性でもこの四層のことばを使用する可能性があると考えられる。結婚しなくても一人で生活していても家事はあるし、社会的活動への参加もあるのである。

無職主婦が投稿をすれば第三層のことばを使ったことになるし、有職主婦

が一日のうちで四層を使い分けている場合もあるだろう。話のしかたを変えなくては、と感じるのは、自分が今、根拠を置いている層のことばから別の層のことばに移動するとき、ということになろうか。

層ごとの対立も考えられる。第三層に根拠を置いている人が第一層のことばを批判したり、あるいは第四層をひきずって第二層で話せば「けじめがない」と批判されることもあろうし、第二層から切り換えずに第一層で話せば「理屈っぽい」と言われるかもしれない。

だが一方、木村治美さん(注6)のように、第三層に第四層のことばをとり入れた調子でエッセイに新しい文体をもたらした女性もいる。今後、模索しながらも、層どうしの対立はやがてまじり合いの方向に少しずつ進んでいくのではないかと思われる。

一方、男性にも家事分担をする若い層が増加しつつあり、また男性の側の育児休業制度の活用を進めば、男性においてもどのようなことばの層が見られるようになるのか興味深いものがある。

〈発表のあとの意見交換のまとめ〉

この試案につき、参加者からは四層の順序づけ、あるいは各層の定義づけや切り方の厳密性等に疑義が出された。加えて実態調査を実施して四層のモデルをより精密なものに作り上げていく必要性も確認された。

注 記

注1 匿名座談会「録音器をかついで」(『言語生活』23号 筑摩書房 1953年)

注2 岡部冬彦他 座談会「話のくせ」(『言語生活』107号 1960年)

注3 村松友視編『昭和^{クロニクル}生活文化年代記4』所収(TOTO出版1991年)

注4 望月衛「男の雑談・女の雑談」(『言語生活』76号 1958年)

注5 国立国語研究所所員座談会「コミュニケーションあれこれ」(『言語生活』87号 1958年)

注6 『しなやかに女の時間』(集英社 1970年)など。

参考文献

- 伊藤雅子 1984年「ゆたかな表現力のために」(『言語生活』387号 筑摩書房)
- 川口容子 1987年(「まじり合う男女のことば」(『言語生活』429号)
- 木村俊夫 1954年「女性の心理とその言葉」(『言語生活』28号)
- 野村雅昭 1970年「現代東京語の展望」(『言語生活』225号)